

## 写真展「101年目のロバート・キャパ - 誰もがボブに憧れた」

—「伝説のカメラマン」から等身大の人間キャパへ—

2014年3月22日(土)～5月11日(日)／東京都写真美術館

写真展『101年目のロバート・キャパ - 誰もがボブに憧れた』を、2014年3月22日(土)から5月11日(日)まで、東京都写真美術館(東京・恵比寿)で開催します。戦争写真家として知られるキャパは、「ボブ」の愛称で親しまれ、戦場以外でも人びとの喜びや悲しみをとらえました。孤児にほほ笑みかける兵士や、戦車の上で鼻をほじる男の子など、戦時に訪れた安らぎの瞬間や自ら結婚を望んだ恋人ゲルダを写した作品を交えて紹介します。

2014年はロバート・キャパ(アンドレ・フリードマン,1913-54)の生誕から101年目にあたります。20世紀前半、スペイン戦争や第二次世界大戦をはじめ、数多くの戦場の写真でその名を轟かせ、今では報道写真の伝説と化しているキャパですが、その実像はギャンブルが好きで、多くの友人たちとともに人生を楽しみ、なによりも女性たちを愛した普通の男性でした。「ボブ」の愛称で親しまれた彼の生涯はしかし、愛した女性ゲルダ・タローとの死別や映画界での失意、写真家を続ける上での葛藤など、決して順風ではなく、むしろ挫折と生き急ぐかのような焦燥感にさいなまれていたとも言えます。

本展は、東京富士美術館のコレクションを核に、残された作品の中から、戦場以外でキャパが同時代を生きる人々への共感や友人たちへの思いから写したカットも数多く紹介します。新たな100年に向けて「プラスワン」というコンセプトでキャパの真骨頂ともいえるユーモアや生きる喜びが表れた知られざる作品を中心に独自の作品構成を試みました。等身大のボブ・キャパを紹介するこれまでにはない機会であると同時に、今も多くの人を引きつけてやまない彼の人間性にも焦点を当てた展覧会です。

作家で彼の友人の一人、ジョン・スタインベックは「キャパは多くの友人に愛されていたが、それ以上にいつも友人たちを愛していた」と書き残しています。「伝説のカメラマン、キャパ」ではなく、挫折や失意を味わいながらも、あたかも好きだったギャンブルを楽しむように、40年の写真人生に命を賭けたボブの魅力をご覧ください。



ロバート・キャパ  
1951年 ルース・オーキン撮影  
東京富士美術館蔵  
© International Center of  
Photography / Magnum Photos

## 「101年目のロバート・キャパ」開催概要

【展覧会名】 101年目のロバート・キャパ - 誰もがボブに憧れた

Robert Capa, the 101st Year: They All Adored Bob

【開催期間】 2014年3月22日(土)～5月11日(日) 45日間

【開館時間】 10:00～18:00(木曜・金曜は20:00まで。入館は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日(ただし4月28日と5月5日は開館)、5月7日(水曜日)

【開催会場】 東京都写真美術館 地下1階展示室(東京・恵比寿)

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

JR 恵比寿駅東口より徒歩 7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩 10 分

当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

【料 金】 一般 1,100 円(880 円)／学生 900 円(720 円)／中高生・65 歳以上 700 円(560 円)

※( )内は 20 名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員

※小学生以下及び障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

※観覧券は、ローソンチケット、チケットぴあ、CNプレイガイド、イープラス、セブン-イレブンでも2月1日から会期終了まで発売予定(購入時に手数料がかかる場合あり)。団体など各種割引は会場窓口のみ。

【主 催】 朝日新聞社

【共 催】 東京都写真美術館

【企画協力】 東京富士美術館

【特別協力】 マグナム・フォト東京支社

【後 援】 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、ハンガリー大使館

【協 賛】 野崎印刷紙業

【展覧会に関する一般問い合わせ】 TEL03-3280-0099(東京都写真美術館)

【公式サイト】 <http://www.capa101.jp> 【美術館ホームページ】 [www.syabi.com](http://www.syabi.com)

【巡 回 展】 2014 年 8 月 2 日(土)～9 月 15 日(月祝)／九州芸文館(福岡県筑後市)

## ロバート・キャパの生涯

1913 年にハンガリーのブダペストに生まれたロバート・キャパ(本名アンドレ・フリードマン)は、1930 年代から 54 年の死去に至るまで、写真家として世界中を駆け巡り、各地の戦争や人々の暮らしをカメラに収め続けました。1932 年、コペンハーゲンで演説したトロツキーの写真で事実上のデビューを果たします。翌年、ナチスが席卷するドイツを離れパリに移住。ここで後の『マグナム・フォト』の創設メンバーとなるカルティエ＝ブレッソン、デビッド・シーモアらと知り合い、唯一自ら結婚を望んだと伝えられる女性、ゲルダ・タローにも出会います。1936 年頃からロバート・キャパの名前で作品を発表し、スペイン内戦中に撮影した「崩れ落ちる兵士」の写真で一躍世界的に有名になりました。第二次世界大戦勃発以降、『LIFE』などの特派写真家としてヨーロッパ戦線の重要な場面を記録。特にノルマンディー上陸作戦(Dデイ)の際に撮影された一連の作品は 第二次大戦中の最高傑作と評価されました。20 年あまりの間に取材した 5 つの戦場で、命がけで撮影した幾多の衝撃的な写真と同時に、激動の世界に生きる一般市民や友人、恋人たちの姿を深い共感をもって捉えました。終戦間際には女優イングリッド・バーグマンと恋に落ちます。1954 年 4 月、初来日を果たしますが、翌 5 月 25 日、『LIFE』の要請でフランス領インドシナ(現在のベトナム)で撮影中、地雷に触れて死亡しました。1955 年、キャパの業績を記念して、ロバート・キャパ・ゴールドメダル賞が設立され、以後毎年優れたフォトジャーナリストに授与されています。

## <マグナム・フォトとは>

1947 年、キャパがアンリ・カルティエ＝ブレッソン、ジョージ・ロジャー、デビッド・シーモアらとニューヨークとパリを拠点に設立した写真家集団です。今日でも、マグナム・フォトは、約 60 名の写真家が在籍し、キャパの遺志を継ぎながら、世界規模で写真によって新しい価値を生み出し続けています。

## 写真展「101年目のロバート・キャパ - 誰もがボブに憧れた」 展覧会構成と見どころ

※本展は、東京富士美術館所蔵作を中心に、作品の制作年代や時代にとらわれず、章ごとに設定した独自のテーマに基づき構成しました。構成は変更される可能性があります。

### 第1章:時代

1932年に撮影した亡命中のトロツキーにはじまり、日本軍に対峙する中国の市民や1940年代初頭のロンドン、連合国軍によって解放され、歓喜に沸くパリの街など、作品を通してキャパが歩んだ時代を概観します。パリ近郊のシャルトルでは解放後、ドイツへの協力者とされた女性が剃髪され、市民の笑いものにされる様子も写されています。戦後は建国後のイスラエルや東京のメーデーなどを中心に、20世紀前半の世界情勢をキャパの視点でたどります。



空襲警報が鳴り響く中、防空壕へと急ぐ女性  
スペイン、バルセロナ 1939年1月 東京富士美術館蔵  
© International Center of Photography / Magnum Photos

### 第2章:戦渦

1937年7月、スペイン内戦で撮影された「崩れ落ちる兵士」がアメリカのグラフィック誌『LIFE』に掲載され、ロバート・キャパの名は一躍有名になりました。本章は、日中戦争や第二次世界大戦での北アフリカ戦線、イタリアの戦場のほか、連合国軍によるノルマンディー上陸作戦(Dデイ)など多くの代表作を含みます。死の直前に撮影されたベトナムの草地で地雷を探知しながら行軍するフランス軍の作品も紹介します。

#### <キャパを知るワンポイント①>

1944年6月、キャパはノルマンディー上陸作戦(Dデイ)取材。撮影した写真を急ぎ、ロンドンに送りました。この時キャパのフィルムを受け取ったのが今もパリに住むジョン・モリス氏(97)です。しかし、暗室係が現像を急ぎすぎたため、数本のネガが台無しになっています。モリス氏はわずか11枚の使える写真を英国情報省で検閲させた後、『LIFE』の編集部へ届ける配達員が出発する直前に原稿となるプリントを渡すことに成功しました。写真は大きく取り上げられ、同作戦の激しさを世界に伝えました。本展では11枚のうち2枚を展示。作品は、映画『プライベート・ライアン』(1998年アメリカ、監督:ステイブン・スピルバーグ、主演:トム・ハンクス)のモデルとしても知られることになりました。会場ではモリス氏が在りし日のボブについて語る、本展オリジナルインタビュー映像を上映します。



ジョン・モリス氏  
フランス、パリ 2013年12月

### 第3章:つかの間の安らぎ

戦場と化したスペインのマドリードやバルセロナ、チュニジア、シチリア、フランス領インドシナ(当時)などで、キャパは人々が人間性を取り戻したほんのひとときをフィルムに焼き付けました。激しい戦闘の裏側で、手紙を書いたり、チェスに興じたりする兵士たち、また軍の車両に腰かけて編み物をする女性兵士の姿からはつかの間の平和を享受できる喜びが伝わってくるようです。幼少期から持ち前の愛嬌で周囲の人々に助けられ、戦場でも明るさとユーモアを失わずに兵士たちと接したキャパらしい視点による作品を集めました。戦場の別の一面をご覧ください。



前線に向かう前に、女性に別れを告げる共和国軍の兵士  
スペイン、バルセロナ 1936年8月 東京富士美術館蔵  
© International Center of Photography / Magnum Photos

### 第4章:友人たち

キャパは多くの友人たちと親交を深めました。友人の中には著名人も多く、とりわけスペイン戦争以来のつきあいとなった小説家のヘミングウェイや大作「ゲルニカ」を描いたパブロ・ピカソ、「怒りの葡萄」の著者ジョン・スタインベックとの関わりは有名です。また「ロバート・キャパ」の名付け親でもある恋人ゲルダ・タローや第二次世界大戦後の無力感の中で愛し合った女優イングリッド・バーグマンなどの作品を通じて、恋多き男性としての一面も紹介します。

#### <キャパを知るワンポイント②>

##### 「ロバート・キャパ」という名前は、恋人ゲルダ・タローがつけた架空の写真家の名前だった

1930年代、フリードマンの写真はほとんど買ってもらえず、わずかに売れた場合でも安値で、生活費を稼ぐこともままなりません。当時、同じユダヤ人の恋人ゲルダ・タローは、既に偉大な業績があるアメリカ人のカメラマン「ロバート・キャパ」なる架空の人物になりすますことを提案。フリードマンとゲルダは、「ロバート・キャパ」として、自分たちで撮影した写真を出版社や通信社に持ち込み、仕事を軌道に乗せていきました。



キャパがベッドで眠るゲルダ・タローを写した写真(パリ 1936年)は日本初公開。ゲルダはキャパが、唯一自ら結婚を望んだ女性だったと言われます。しかし、出会いから約3年後の1937年7月26日、タローは、ブルネテでスペイン内戦の撮影を行っていた際、戦車に衝突されて死亡しました。

ゲルダ・タロー フランス、パリ 1936年  
International Center of Photography 蔵  
© International Center of Photography / Magnum Photos

## 第5章:人々とともに

フランコ反乱軍との戦いに赴く兵士たちの生き生きとした表情や子どもを抱きかかえて逃げる家族、家を破壊されて立ちつくす住民、防空壕の中で語り合う年配の男女など、キャパは同時代の人々の喜怒哀楽を市民の目線で写しました。ロシア兵に時計を売りつけようとする米兵の顔つきや大興奮で娯楽を鑑賞するバルセロナの子供たちには、キャパ自身も思わずほほえんだのではないのでしょうか。

キャパが報道写真の先駆者となったのは、「戦争の世紀」を生きる中で、絶えず人間へのまなざしを持ち続けたからとも言えます。最終章では、見る人がキャパのレンズを通して、当時の人々に温かく向き合える作品を紹介します。人々に共感し、思いやりをもってその姿を見つめたキャパの視点をご覧ください。



ドイツ軍から解放された街で  
フランス、シャルトル 1944年8月 東京富士美術館蔵  
© International Center of Photography / Magnum Photos



ツール・ド・フランスのレースを見物する人びと  
フランス、ブルターニュ 1939年7月 東京富士美術館蔵  
© International Center of Photography / Magnum Photos

### <キャパを知るワンポイント③>

#### キャパの肉声が聞ける音声ガイド

会場の音声ガイドには、キャパが戦前に米国のラジオに出演した際の貴重な肉声を収録しています。生の音源は2013年にニューヨークの国際写真センター(ICP)で見つかりました。その中でキャパは、スペイン内戦やジョン・スタインベックとのソ連(当時)旅行についてインタビュアーに答えています。音声ガイドではその一部を聞くことができます。

## そのほかの展示:ビンテージ・プリント

キャパの生前、雑誌の原稿などにも使用された極めて資料性の高いビンテージ・プリントを展示します。プリントには痛みも見られますが、裏面には寸法や現像時のスタンプ、手書きのキャプションなどが書かれており、撮影当時のキャパや関係者の息づかいが伝わってくるかのようです。

## <展覧会ピックアップ>

### ○キャパと同時期のカメラを展示

会場では、1930～40年代当時に実際に使用されていたカメラ数台を展示します。今ではアンティークとなったカメラの一部を手にとることができます。

### ○広報・展示デザインは、アートディレクターの竹田麻衣子さん

#### <竹田さんからのメッセージ>

ロバート・キャパの名前は知っている、いくつかの写真をみた事もある。世界で最も有名な報道写真家の一人、過去の偉人。そんな印象を持つ若い世代は少なくないでしょう。

しかし彼の残した写真には、過去の偉人ではなく、私達と変わらない 20～30 歳代の青年の等身大の眼差しがありました。戦場でも、街の中でも。

戦渦の中で鮮やかに生きた、勇猛で温かく孤独で、とびきりセクシーなキャパ。

そのフレームの外側の景色を想像し、現代の私達の暮らしに置き換えながら、キャパの眼差しや、キャパの愛した人々に触れてください。

生誕 101 年目にあたるこの年に、これからの時代を生きていくこれからの人達に、特にみて欲しい写真展です。



Lim 竹田 麻衣子 maiko takeda

アートディレクター・グラフィックデザイナー

1976 年生まれ。多摩美術大学デザイン科卒業。デザイン制作会社、omdr 株式会社を経て 2008 年独立。紙媒体を中心に、アートディレクション、グラフィックデザインを行う。

近作に CHANEL NEXUS HALL のアートイベントグラフィック、谷尻誠『1000%の建築』、IDÉE『LIFE CYCLING』のブックデザイン、サロンコスメのパッケージデザインなど。

### 【本展に関する記事・報道のお問い合わせ】

「101 年目のロバート・キャパ展」広報事務局(共同 PR 内) 担当:佐藤、菅原、三井  
〒104-8158 東京都中央区銀座 7-2-22 同和ビル 7F

TEL:03-3575-9823 FAX:03-3574-0316 E-mail: [101capapr@kyodo-pr.co.jp](mailto:101capapr@kyodo-pr.co.jp)